いち にの さん。

キロキロなお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いち　にの　さん。

【Ｎコード】
Ｎ０２０６Ｏ

【作者名】
キロキロなお

【あらすじ】
二宮穂乃香（愛称ニノ）は会社の異動でやって来た土地で、高校の頃の友人である一之瀬聖也（愛称イチ）と再会する。彼は密かに彼女が忘れられずにいた片思いの相手で……これ幸いと押してみたのはいいけれど妙な関係になっちゃった！　百戦錬磨のニノちゃんの片思い奮闘記。本編完結、後日談アリマス。

step. 0

わたしはあの時、どうして待ってしまったのだろう。
ずっと、後悔している。
会えなくなるなら、いっそ動けばよかったのだ。
進学した大学を卒業して、どうにか就職もして希望通りの仕事をして……なのに、心はあの時から少しも動いていない。

あの時の、不器用な恋を。
まだ、あなたに恋してる　少女　のまま足掻いてる――…。

故郷から遠く離れた街の通りで、見覚えのある顔を見つけた。
あり得ない。
故郷にいた学生の頃は、高校を卒業してしまえば会うこともなかったのに……どうして？
運命なのかな？
なんて、期待してしまいそうなシチュエーション。

「イチ？」
「ニノ？」

相手もわかったみたいだった。
互いに目を見開いて、指を指す。それくらい、奇跡みたいな偶然だった。
高校時代の親友。ううん、違うな。
一番仲のよかった男友達……でもなく、たぶん一番好きだった男の子だ。

あの頃。
花の間を飛び交う蝶のように告白してきた男の子と付き合っては、その愚痴を彼に聞いてもらっていた。まだ、恋心なんて気づいてもなかった。
穏やかに笑って「大変だね」と優しく話を聞いてくれる、居心地のいい場所。
それが欲しくて、告白してくる相手と手当たり次第に付き合っていたのかもしれない。
「元気だった？」
「うん。偶然だね」
「ホント、あっちにいた時は全然会わなかったのに……こっちに住んでるの？」
「そうだよ、ニノは仕事で？」
「最近ね、異動になったの……こっちはまだ慣れてなくて」
こう言えば、優しい彼はきっと応えてくれる。
「そっか、じゃあ相談にのるよ？　僕は結構長いんだ」
「わーい」
ほらね。
彼はクスリ、と笑ってそんな私を見る。
「彼氏の愚痴も聞くよ、いるんでしょ？」
と。
ピクリ、と心臓が跳ねる。
「いない、よ」
そうだよ、いるワケない。ずっと後悔してたのに。
高校を卒業してからは、誰かと付き合う気になれなかった。
「イチは？」
「え？」
「彼女、いるの？」
「いるよ」

あの時、動かなかったことをわたしは　また　後悔した。

step. 1

一体、わたしは何をしてるんだろう。
不毛だ。
でも、美味しいものを目の前にしてしまうと、そんな考えはスコンと抜けて大好きな彼との時間を満喫してしまう。だって、目の前のイチは優しくて、以前と変わらない眼差しで微笑んでる。

「しあわせ～！　ここ、いいね。ありがと、イチ」

「よかった。ホラ、しっかり食べなよ……どうりでフラフラしてると思ったんだ」
「だって、仕事から帰ったら作る気力なくて。もともと家事は苦手だし、簡単なモノですましちゃうんだもん」
「ニノらしい」
「あっ！　笑ったな～できないワケじゃないよっ」
ツンと横を向いて、まるで高校の頃に戻ったみたいなやりとりに涙が出そうになる。
手放したくない。だから、不毛でも彼女に悪いと思ってもこの関係を壊すことができないのだ。
「あのさ、わたしばっかり世話になるのも気がひけるのよね」
と、食事を取り終えひと心地ついた頃に提案してみた。
「ニノが？」
意外、という表情にムッとして「そうよ！」と言い返す。
「まあ、わたしができることなんて高が知れてるのは確かだけど……なんかないの？　相談くらいなら乗るよ？」
「相談？」
「ほらぁ、彼女のこととか。わたしも昔よく聞いてもらったでしょ

？」
「ああ……なくはないけど」
「なら、遠慮なくどうぞ。百戦錬磨のニノちゃんがズバッと解決しちゃうからさぁ」
かなり疑わしい目で見られたけれど、イチも相談する気になったらしい。
さぁ、来い。
わたしは　好きな　男を手に入れるためなら、どんな卑怯な手段も厭わない　悪い　女なんだよ。残念だったね、イチ。
ふふふ、と薄く笑ったわたしを、イチが少し困ったように眺めていた。

それから、イチは場所を変えようと言った。
どうやらあまり人には聞かれたくない相談事らしい。落ち着いた飲み屋、というよりはバー？　に移って、ようやく口を開いた。
「ニノはどんな男が好き？」
イチが好き、とは流石に言えなくて、「うーん？」と唸る。
「どうして？」
なんでそんなことを訊くの？　と逆に尋ねてれば、「僕って面白みがないからさ」と笑う。
「えー？　そう？　そんなことないよーそりゃ、派手さはないけどさ。イチは優しいし、結構人気あったじゃん」
「あー、うん。いい人ってよく言われるけど……」
「そうでしょ？　わたし、イチみたいないい人知らないよ。なんで、そんな弱気なの？」
まさか、今の彼女が浮気してるとか？

あり得ない！
イチを振るなんて何様？！　勿体無いよ！！
「ガンガン押せばいいんだよ！　イチだったらどんな女でも落とせるって」
「……え？　でも、昔ニノは強引な男はダメだとか言ってなかった？」
「え？」
そんなこと言ったっけ？
……そういや、高校の頃付き合った男でいたっけ？　無駄に胸とか尻とか足とかに触ってきてさ、速攻別れてやったんだった。
だって、アイツ最低だったんだよ。当たり前みたいに服を脱がそうとするんだもん。
とか、そんなことをイチに。
「ははははは、そういやあったね！　そんなこと」
昔のわたし、なんて相談してるんだよっ。それじゃ、タダの尻軽女みたいじゃん！　ばかーっ。
「いやいやいや、わたしだって成長するよ。うん、多少強引なのもオッケーっていうか、要は気持ちの問題なんだってば！」
「気持ち？」
「そう、好きって気持ちがあればね……いい、と思うよ」
あれ？　わたし、何を真面目に相談に乗ってるんだ？
別れさせるのがもくてきーっ、これじゃ普通に彼女と上手くいっちゃうじゃん！

「そうなんだ、僕は消極的すぎたんだね」

とイチはやけに納得して、わたしに笑いかけた。
ちょっと、ドキリとする艶っぽい微笑みで今まで見たこともない表情をしている。
「ん？」

肩、抱かれてますけど？
顔、近いですけど？？
わたしの心臓、Ｍａｘでトキメいてますけどっ。

step. 2（前書き）

この場面には、やや赤裸々な単語（会話）があります。ご注意ください！

step. 2

イチの唇が触れた。
そうして、離れてすぐに耳たぶを甘噛みされて心臓が跳ねる。
耳の中に入ってくる吐息までイチって感じだった。
どんなだっ？！

「こんなのでどうかな？」
「うん。いい、と思う」

って、普通に返事しちゃってますけど、わたしっ。
ふっ、て耳元でイチが笑った。
ああ、もう！　心臓がうるさいよっ……だって、知らなかったんだもん。
イチがこんなにも男の人だなんて。
しかも、練習のためにキスが出来ちゃう人だったなんて！
何より、そんな　キス　なのに幻滅するどころか　こんなにも舞い上がってしまえる　自分　がいるなんて全然知らなかったよー。
「じゃあさ、もう一つ相談に乗ってもらっていい？」
定位置に戻ったイチが、いつもの表情で訊いたから頷く。
「ん。いいよ、どんなの？」
「ニノはどんなセックスが好き？」
腰にイチの手があることを、この時ようやく気がついた。
「　はぁ？　」
まさか、彼からそんな単語を聞くなんて思わなかった。
「ニノ？」
イチが怪訝な表情をする。
「もしかして、知らない？」

「し、知らないわけないじゃない……当然でしょ！」
胸を張ってる場合か。正真正銘初心者なんですけどっ！！　つい見栄をはりました、ゴメンナサイ。
だって。
これでも蝶の女、と呼ばれてきたわたしだよ？　処女、なんてきっと誰も信じないし！
「口で説明なんてできないでしょ？　そういうの」
「まあ、そうだね」
上手くかわせたかとホッとしたのも束の間、普通にコンビニに誘うように「じゃあさ」とイチはわたしをホテルに誘ってきた。

ショックだった。
「ニノ？」
寝てしまえば、彼女からイチを盗れるかもしれないと思ったのは確かだ。なんて、打算的な女なんだ？　わたしは。
しかしだ。
本当にイチが最後までするだなんて、本気では思ってなかった。彼は優しくて、誠実で、真面目な……浮気なんて絶対しないタイプの男なんだよ。
だから、涙が零れた。
わたしは。
イチに抱かれて後悔なんてしてないよ、だけど……悪いと思った。
わたしみたいな幼稚な女、イチには似合わないよ。ごめんね。でも、好きなんだもん。手放したくない。
「なんで、泣いてるの？」
「べ、べつにっ泣いてなんか！」
「初めてを、僕なんかに奪われたから？」
「は？」

「本当は――男性経験、なかったんでしょ？　ニノ」
そう覗きこむ優しい人の眼差しはほんの少し曇って、わたしの乱れた髪を梳いた。

ｓｔｅｐ．３（前書き）

ｓｔｅｐ．２から引き続き、やや赤裸々な単語（会話）があります。
ご注意ください！

step. 3

「な……なん？　なんでっ！」
わたしの明らかな動揺にイチは首を傾げた。
「なんで初めてだってわかったか、ってコト？」
その通りだが、頷くことはできない。パクパクと口の開閉を繰り返す。
「そりゃ、わかるよ」
と、彼は苦笑した。どうやら、男の人からすると一目瞭然らしい。なんで？
「まあ、詳細は伏せるけど。ニノ、あの時痛がったし、血も……出たし、慣れてそうになかったしね」
「じゃあ、なんでやめなかったの？　面倒でしょ？　初めての女なんて」
浮気ならなおさらだ。イチの行動は、わたしの　今までの　彼のイメージからすればかけ離れている。
たとえ、それが男の本能なのだとしても、彼は変わってしまったのだろうか？
「やめるハズないよ。せっかくニノがその気になったのに」
イチの表情はわたしに対してほんの少しの同情を含んでいた。
「え？」
同情される意味が分からないんですけど……むしろ、わたしの方がイチに同情するよ。
なんで、抱いちゃったの？　って。
わたし、喰らいついちゃうよ……スッポンみたいにタチの悪い女なんだからねっ。
そっ、とイチはわたしの頬を手のひらで包んで、上向かせる。
「そんな顔しないで。もう絶対逃がさないし、手離す気なんてない

んだ……ごめんね」
　彼の謝罪を理解するより先に口づけられて、裸の胸を揉まれた。そこが感じやすい場所だって、さっき初めて教えられたばかりのところを弄られて、わたしは始まってしまったことにすら気づかず、従うしかなかった。

　それから何度か美味しいお店を教えてもらうついでに、そういう関係になった。
「イチって、ちょっと変わった……よね？」
「そう？　僕はむしろ全然変わってなくて自分で嫌になるけど」
　今日の料理は和風創作だ。刺身が美味しくて、色の調和もいい。知らず、箸が進む。
「そうかなー？　すんっごく大人になったよ。昔も大人びてはいたけど」
「大人？　例えばどんなトコロが？」
　彼女がいるのにわたしと……なんてことは、自分の首を絞めることなので言えない。婉曲に、婉曲に。
「んー、女性に対して器用になった？　とか」
「不器用だよ。呆れるくらいね」
「嘘だー」
　わたしは笑った。イチは「分からないならいいけど」と情けない顔で肩をすくめて……そんなところは高校の頃と少しも変わってなくて、なんだか無性に彼の言葉が本当のように思えてきた。
（そうかー、そうだよね。彼女がいるのにわたしと……しちゃってるんだもんね。イチからしたら不本意か）
　ごめんねー、と心の中で謝って、でも利用しちゃうよとその腕に

甘え――わたしは、そっと彼に寄り添った。

step. 4

退社前に捕まったわたしは、仕方ないなと了承した。
誘いを断るのも後々の仕事に支障が出る。円滑なコミュニケーションをはかるには、多少の妥協も必要だ。たとえ、下心を含んだ合コンのお誘いだとしても……対処には幸か不幸か慣れているので上手くかわせる自信がある。
フフフ、百戦錬磨のノニちゃんを舐めんな！　なんて、処女喪失は二週間前だけどネ。

「って、コトなの。イチ」
ごめんね、と手のひらを合わせて頭を下げる仕草をする。
わたしとしても、イチと一緒に食事をするほうが絶対楽しいし、幸せなのだけれど……会社の人間（別部署）からの誘いを断るとこれまでの経験上あまりいい影響〔こと〕がない。それなら、少し我慢をして付き合って適当なところで抜けたほうがあとの仕事がしやすいのだ。
「ふーん、それってニノ目当てなんじゃないの？」
面白くなさそうにイチはビールを口にする。
「ははっ、客寄せではあるかもね……よくあることだし。慣れてるから平気だよ」
「はいはい。で、どこでするの？」
「えっと、確か……筋の〇〇ってお店だよ」
「わかった。９時くらいに迎えに行くから」
「……え？」
「彼氏がいるとか言ってかわすつもりなんだろ？　だったら、男が迎えに行ったほうが信憑性があるし、次からの誘いも減るんじゃない？」

「で、でも」
嬉しい。それは、とっても嬉しいけどっ。
「僕なんかでも一応男だし、利用できるものはしとけばいいよ……なんて、僕じゃ役不足かな？」
首を傾げて尋ねてくるイチに、「いやっいやっいやっ！」と慌てててわたしは首を振る。
願ってもないです。むしろ、嘘でも他の人に「彼氏」として紹介できるなんて……夢みたい。わたし、すっごい役得？
ハァハァ。
あやしい鼻息まで出ちゃうっての！
「じゃ、じゃあ　是非　お願いしていい？」
エヘヘ、と笑ってわたしは上目遣いで彼に甘えた。

（　なんかすごかったな　）

昨日の夜のことを思い出してわたしはポーッとしてしまった。あのあと、居酒屋を出て近くのラブホテルに入ったらいつになく乱暴に抱かれてしまった。
あんまり激しくて最中のことは覚えてない。わたしが慣れてないせいもあるけど……目が覚めたら体中の至るところにキスマークがあって……洗面所の鏡で首筋とか隠し様のない場所に見つけた時にはどうしようかと悩んだ。
とりあえず、コンシーラーで目立たないようにして、あとはできるだけハイネックの服を。
太腿の内側にもあったから、露出の高いものはやめてパンツにした。
思わず顔がニヤけてしまうぞ。コラ。
こんな幸せな悩みが世の中にあっていいのか？　いいんだね。う

ふふふふ。
隣に座った男が話しかけてくるけれど、適当にあしらって食事だけは黙々と口に運ぶ。
「幸せそうに食べるんだね、二宮さん」
「幸せですから」
モグモグ。
「穂乃香って呼んでいいかな？」
「ダメです」
モグモグ。
「どうして？」
「わたし、いま付き合ってる人がいるんです」
モグモグ。
「ああ、だろうねぇ」
と、馴れ馴れしい男は肩を抱いてきた。
むむっ、このオトコ……手が早いゾ。
ピシャリとその男の手を叩いて睨むと、よほどの自信家なのかニンマリと笑ってきた。
頭、おかしい人に認定。
「オレのほうがいいと思うけど？」
モグモ……。
「は？」
この勘違いオトコが、何か言いましたカ？
「いまの彼氏よりずっと満足させられる自信あるんだけどなあ、オレ」
カチン、カチンときましたよ！
何だ、その自信。どこから来た！　否、わたしから想像して下世話な連想をしないで欲しい。
軽く見える外見で悪かったねっ。
「余計なお世話です。彼以外で　わたし　が満足するなんてあり得ません」

キッパリ言い放って、ヘラヘラ笑う男を一瞥。フン！
あとで嘘とは言え迎えに来るイチをそんな目で見られるなんて我慢ならなかった。キチンと訂正しなければ。
「高校の時から片思いしてようやく恋人らしくなったんですよ？わたし、　超　真剣なんですから失礼なこと言わないで下さい」
顔は笑って、目はしっかりと呆然としている男を見据えた。
と。
そんなやり取りを何回か、別の男とも繰り返した。
これだから合コンは苦手なんだってば！　ろくな男がいないんだからっ。
つーか、寄って来ないんだよねぇ？　なんでだ？

step. 5

いい加減うんざりして携帯で時間を確認すれば、ようやく9時になろうかという頃合。
食べるものはまんぷくお腹の中におさめたし、飲むものも酔わない程度に適当に飲んだ。忘れ物もない。
よしよし。
「じゃあ、わたしはここで」
そそくさと席を立ち、引き止められないうちに出ようとしたら腕を掴まれた。
なに？　この手？
さらに別の腕が肩を抱いてくる。
んん？　誰よ、邪魔よ！
文句を言おうと顔を上げれば、声をかけてきた男の一人が有無を言わせぬ様子で笑っている。
「ちょっと！　わたし、これから約束があるの。離してよ」
「そうはいかないんだよ。結構有名な話、二宮さんの彼氏持ちはただの口上なんじゃないかって噂だし誰も見たことないって本社の人から聞いたんだよね」
そうと知って、逃がすつもりはない……とのケダモノじみた男の視線にわたしは身を固くする。
周囲には他にも社内の人間がいるけれど、見て見ぬフリなのか誰も助けてくれる気はないらしい。
確かに本社時代も彼氏持ちだと吹聴してかわしていてはいたけれど、ここまでその噂が流れていようとは予想外だった。
一体、どんな情報網よ……あんたたち。
「なにそれ……わたしに　彼氏　がいないとでも？」
悪いけど、そんな風に見られたことは一度もない。むしろ、二股

三股は当たり前とか思われるタイプなんだよ、不本意ながら！
「会わせてくれたら信じるよ」
なんて、あんたたちに会わせる義理はないんですけど！
ないんですけどねっ。
「いいよ。ちょうど、来たみたいだし」
わたしの立っている場所から、入り口の扉が開くのが見えた。
「イチ！」
手を挙げて、振る。
彼もすぐに気付いたようで、店内を見渡すことなくやってきた。
「じゃあ、さようなら」
呻く彼らの腕を振り解き、わたしはイチの腕に腕を絡めてにこりと笑う。
イチの機転に感謝だ。
危なかった……。
「ありがと、イチ」
小さく礼を言うと、イチは「まあ、こんなことだろうとは予想してたから」とふわりと微笑む。
ああ、やっぱりイチっていいなあ！
うっとり。
彼は後ろをうかがいながら思案して、わたしに悪戯っ子のような眼差しを向けた。
「……もう一つ、ダメ押ししとく？」

（　え？　）

その人差し指がシッと唇に触れて、そのまま顎に滑り持ち上げられたかと思うと柔らかいものが触れた。
「んっ……ッ」
わたしはその優しい感触をよく知っている。
最近その味にハマっていて、舌を絡ませるのがすごく気持ちよか

った。
公衆の面前で……エッチみたいなキス。
恥ずかしいけれど欲しいという欲望は止められなくて、イチの首に腕をまわして夢中になる――ああん、いいよぉ。
「立てる？」
「立てない……」
わたしの情けない答えに、イチは笑って手を貸してくれた。

目が覚めると見覚えのない天井。白け始めた外の光がカーテン越しの窓から部屋の中をぼんやりと照らし出している。
……ああ、また記憶が飛んでる。ここはどこ？
けばけばしい装飾はないしベッドはごくシンプルな造り、ホテルでもラブホテルでもないみたい？
もちろん、自分の部屋でもない。
昨日の夜、合コンのあったお店から出てイチに誘われるままにタクシーに乗って、イチャイチャしていつの間にかこのベッドで抱き合っていたような？
「……まあ、いいか。目の保養」
スヤスヤ眠る彼の無邪気な寝顔が目の前にある。高校の時よりも男っぽくなった顔つきも、眠っているとかなり幼くなってあの頃の面影がある。
寄り添えば、当然のように二人とも裸で素肌同士が触れ合う。
（抱きついてもいいかな？　いいよね）
そっと背中に腕をまわして、その胸に頬をすり寄せる。
肌のぬくもりと規則正しい鼓動に安心して、わたしはまた深い眠りに落ちた。

ｓｔｅｐ．６（前書き）

コチラの場面の冒頭にＲ１５程度の表現があります。ご注意ください！

step. 6

二度目に起きた時、すでに本番が始まっていて驚いた。
最中にここがイチの部屋だと聞いて、さらにビックリ驚いた。
（ええっ！　いいの？　彼女は？！　イチって大物ーっ！　ああ、一緒に住んでないのか……えー、でも、ちょっとヤバくない？）
ついついニマニマしてしまって、イチに見咎められた。
「考え事できるなんて、余裕だね……ニノ」
「やっ……ダメ！　いやぁん」
「イヤって声じゃないよ」
くすくす響くイチの苦笑いにわたしは体を熱くして睨んだ。
だってぇ、イイんだもん。嘘はつけない性格なの……知ってるクセにっ。
朝から濃厚な交わりをかわして、体はぐったり、心はほどよく満たされてベッドにうつ伏せになって横たわり火照りを冷ました。
「コーヒーでいい？」
上半身を持ち上げたイチの問いに、ウンと頷いて、ベッドを離れる彼の背中をうっとりと見送った。
（なんか、恋人同士みたいじゃない？）
と都合のいい夢を見る。

まあ、夢から覚めるのは一瞬なんだけどね。

遠くチャイムが鳴って、誰かが来たのか寝室の向こう側から話し声が聞こえた。
（……女の、人？）
声の感じから、二人の仲が親しいことはすぐに分かった。
わたしは、急いで寝室の床に散らばった下着を拾って着け、上は

簡単にブラウスだけを羽織ってそろりと扉から顔だけを覗かせた。
カウンターの向こうにあるキッチンでイチと、女の人が話している。
ツヤツヤの黒髪は腰まであって、背はイチの肩くらい。大人しそうな印象の大きな瞳を見開いたり、細めたりしている。
一途そうな、可愛い女の人だった。
まるで、わたしのコンプレックスを　形　にしたみたいな理想的な顔立ち。目立たないけれど、スタイルもかなりいいみたい。羨ましい。
そりゃあ、わたしだって見た目は悪くない。けれど、染めたような茶色の地毛はゆるやかなクセのせいで軽薄に見えるし、ややつりあがった目は気が強そうに……無駄に目立つ体の凹凸は経験豊富だと噂された。
（イチってば、ああいうのが好みなのかな？　じゃあ、わたしって全然じゃん？　望み薄？）
挑んでも勝てる気なんてしないけど。でも――。
「イチ」
わたしは扉を開けると、顔を出し、「この人、誰？」と首をかしげて訊いてみた。

「聖也」
と、彼女もイチを問うように顔を上げ、イチは困ったようにわたしを見た。

step. 7

ごめんね、イチ……と思う。
ここは、物分かりのいい友達を演じるべきところなんだろうな。
でも、無理……全然ムリ！
だって、好き。
あなたが　大好き　なの。

「姉、なんだけど」

「　へっ？！　」
「聖也！　アンタねー少しは間をつくりなさいよっ、ツマンナイでしょ？」
「姉さんのためにつくる間はないよ」
「なんですって？」
「……」
姉、あね、同じ親から生まれた年上の女子、つまりイチの身内っ。
うわーっ、はじめて見た！
そっかー、顔立ちが好みだと思ったらイチと似てるんだ。整ってるワケじゃないけど愛嬌があって、どことなく優しい感じ。癒し系、って言うの？　女の子にしたら、すっごく可愛いんだなー。気付かなかった。
イチに文句を（見た目とは違って結構性格はキツいのかな？）マシンガンのように発射していたお姉さんが、こっちを見たから必然的にわたしと目が合った。
「わっ！　すいません……えっと、二宮穂乃香です。はじめまして」
自分の最初の態度があまりに失礼だったことに気付いて、慌てて

頭を下げる。
まさか、お姉さんだったとはっ！
第一印象最悪じゃんっ。
「ホントにねー、弟の部屋でそーんな格好の女の子に敵視されるなんてビックリよ。聖也は真面目なんだから、遊びならやめてやってね。ホラ、前に会った　清楚な　女の子の方が聖也には合ってると思うな♪」
最後の言葉は、隣にいるイチに対してのお姉さんの言葉だ。
ズキッとする。
そう。きっと、それがイチの　本当の　彼女なのだろう。
「遊び」そんなつもりはないけれど、確かに今の状況を見ればお姉さんの心配はもっともだった。
自分のブラウスの下から伸びた何もつけてない生足を見つめて、ぐっと唇を噛みしめる。
「着替えて、きます」
ペコリ、と頭を下げて寝室に戻る。
戻ろうとした時に、イチが来て「気にするなよ」と言ってくれたけど……落ちこんだ。
（ダメだー、失敗した。彼の身内に嫌われるなんて……ありえないよ）
ニノ、一生の不覚です。

キチンとした服装に着替えてからイチと目覚めのコーヒーをとった。けれど、目覚めのコーヒーってほど雰囲気は甘くはならない。
そこには一緒に彼のお姉さんが座っていて、イチにメニューの注文をつけ、何故かわたしの前にも立派な朝食御膳が並べられている。
ふんわりご飯と赤ミソお味噌汁にこんがり焼き魚。だ、大根おろしまで。

ふわあ！　イチ、完璧だよ、垂涎モノだよ、惚れ直したよっ。ステキ！！
「いただきます！」
手を合わせて、張り切ってお箸をお味噌汁に投入。うふふ。
「シュンとしてたクセに図々しい子ね？　図太いっていうか欲望に素直っていうか」
ん？　なんか小姑みたいな厭味を何度も言われた気もするけど、心象が悪いのは諦めていたので黙っていた。
「図々しいのは姉さんじゃないの？　それに、素直なのはニノのいいところだよ。姉さんみたいに打算で演技なんて器用なことできないんだから」
代わりに、イチがフォロー（？）してくれて最後は姉弟ゲンカ？
みたいになって、慌てて止めた。
「あ、あの……イチ。わたしは平気だから……わたしが失礼だったのは本当だし」
「ほら、見なさい。この子だってちゃんと非を認めて別れるって言ってるじゃないの」
……え？　そういう話？
「姉さん。もう、いい加減にしないと怒るよ？」
「なによ、やけに突っかかるじゃない。いつもはもっと淡白なクセに……あーあ、もっと苛めちゃおうかしら？」
「姉さん！」
わぁー！　さらに姉弟間の空気がピリピリと険悪にっ。
イチが怒るなんてすっごい珍しいんだよ。お姉さん！　は平然としてるけど……わたしは呆然。
ど、どうしよう――わたしのせい、だよね？

step. 8

イチのマンションにやってきたわたしはその部屋の呼び鈴を鳴らした。
カチャ、というノブの回る音とともに、彼女の不機嫌な顔がわたしを睨んだ。
「なによ、また来たの？」
懐柔するにはなかなかに手強い相手だ。
しかし。
それくらいで怯むニノちゃんではないのだ。ちゃんと奥の手も持参しているのだっ。
「はいっ、差し入れ持ってきました。今日はシャルームのチーズスフレです、センセ」
億劫そうに目を瞬かせると、とりあえず門前払いは免れて中に入ることを許された。
「毎日毎日よく来るわね。コレって新手の嫌がらせ？」
「そんなことありませんよぉ、まさかイチのお姉さんが　あの　橘真理子〔たちばな　まりこ〕センセだなんて……わたし、超カンドーです。センセの小説はマイ☆バイブルですから」
「……言い間違えたわ。きっと聖也の嫌がらせね」
仕事用の眼鏡をかけたイチのお姉さん、弥生〔やよい〕さんは嫌そうに顔を顰めた。オン、オフの切り替えが激しいらしくひっつめた髪型やノーメイクの印象はかなり中世的で、最初のふんわりとしたイメージとは少し違う。
「え？」
よく理解できなくて、わたしは首をかしげた。だって、イチが弥生さんに嫌がらせなんてするハズないのに。
なんで？

どうやって？
「ここのマンション、完全オートロックだし。エントランスにある扉の開錠にはカードキーの照合か住人の許可が必要だもの……「イチ」から合鍵でも貰ったんでしょ？」
でなきゃここまで簡単に入って来れる　ワケ　がないと弥生さんは言い切って、わたしも確かにカードキーをイチから受け取ったものだから反論はできなかった。
「よく……分かりますね？　やっぱり姉弟だからかなあ？」
以心伝心、イチと出来るなんて羨ましい。方法があるんだったら是非ともご伝授いただきたい。
魚を見る猫よろしく爛々〔ランラン〕とした目でうかがえば、お姉さんは呆れたとばかりに答えた。
「んなワケないでしょ。当然の推測よ……むしろ、分からない方が摩訶不思議だわ」
と、何故かわたしの顔を凝視して難しそうな表情になる。
「えーっと、わたしの顔に何かツイてますか？」
「弟の気持ちを分析してたの。我が弟ながら厄介な子を好きだなあ、と」
「厄介？　イチの彼女ってそんなに面倒な人なんですか？」
「……ある意味、ね」
諦めたように弥生さんは言って、奥のリビングに歩いていった。
そっか、それなら入りこむスキくらいあるよね。……ヤバい、にやけてきた。
「まあ、ゆっくりしていきなさいよ。差し入れのセンスだけは褒めてあげるわ」
「わーい！」
「そのうち、聖也も来るだろうしね。……って、たぶん貴女の本命はそっちでしょ？」

ぐっ、と言葉を失ってつい弥生さんの顔をうかがってしまう。
なんで、そんなに勘がいいの。
恋愛小説の先生だからですかっ……やっぱり、恋愛マスターは伊達じゃないね。拝んどけ！

橘センセの小説を橘センセのリビングでソファに座って読み耽る贅沢を満喫していると、後ろから抱きつかれた。
「ニノ」
「イチ」
軽くキス、まるで気心の知れた恋人同士みたいだ。嬉しくて、ところけちゃいそう。
「ちょっと、人の居間でイチャつくのやめてくれる？　したいなら隣に移ってしなさいよ」
あ、センセの機嫌が悪いわ。
機嫌がよかったらギリギリまで声をかけずに創作の糧にしたりするのよ。半裸で止められた時は流石に笑って誤魔化したけど……アレは悪魔の所業だったなー。どうせなら最後まで黙って見ててくれたらよかったのに。
なんて。
それじゃ、官能小説か。どんだけ欲求不満なんだ、わたしは。
だって、イチの「好き」って言葉が足りない。そりゃあ、浮気だってことは知ってるけど……少しずつ女の子は　強欲　になるんだよ？　当たり前、だよね？
ソファに押し倒された格好でわたしは「すみません」と謝って、イチは何事もなかったように催促した。
「橘先生、原稿は？」
本来の彼の目的は、コレ。
イチは橘真理子先生の担当をしている編集者だ。お姉さんが小説

家になって、イチの勤めている出版社に所属していたのは偶々〔たまたま〕だったのだけれど……それが上司にバレて、担当に抜擢されたのだとか。

彼曰く、「姉さんのワガママに誰も対処できないんだ。なまじデビュー作で売れて、固定のファンも多いもんだから編集長も強気に出れない」らしい。

その点、イチは身内だし、彼女の扱いも慣れているから催促もしやすいのだろう。

「貴方のマブダチのせいで、まだ、よ。嫌な男ね」

「お互い様だよ」

ピリピリ。

あ、また険悪になってる。

姉弟間のこの空気、案外いつものことだって知ってた？

何を隠そう、わたしは最近知りました。

step. 9

女の子は強欲になる、のは当たり前だとして……浮気相手のわたしがこんなふうに独占欲を持つのはどうだろう？

今日は、この前の合コンとは違って同じ部署の仲間との打ち上げ会だった。

一つの大きなプロジェクトがまとまって、お互いを労うための純粋な飲み会だから気を遣う必要はないし、それなりにお酒も入って気持ちのいい夜だった。

もちろん、そんな楽しい夜でもイチと会えないのは寂しい。けれど、今夜は彼にも仕事ではない何か先約があったらしく「迎えにはいけないけど呑み過ぎないようにね」とのありがたいお言葉をいただいて忠実に酒量は抑えていたのだ。

だから、しっかりと目は冴えていた。

ううん、イチの姿を見間違うなんて酔ってたって絶対ないし！

しかも、その横にはわたしの知らない女性の姿がっ！！

楽しそうに、笑ってた……。

（イチ、ひどいっ）

そんなこと、全然言ってなかったじゃん！

なんで？

それならそれで、ハッキリ言ってくれたら……駄目だって言われたってくっついて行ったのにっ。

それが、イヤだったの？

本命の、彼女……だから？

「にのみやー、どした？」

突然、立ち止まったわたしに気付いて、どうした？　とほろ酔い加減の仲間の一人が聞いてくる。

どうしたも、こうしたもないよ！
「わたし、三次会パス！」
こうしてる間にもイチと彼女は……いーやー！　断固阻止っ。
最近、男女のアレやコレやを経験したわたしの妄想はリアルすぎて、泣きそうだった。
絡み合う男女の姿は男の方がイチで、女が名も知らぬ先ほどの女性の姿に変わる。顔はよく見えなかったからおぼろげだけど……十分に現実的だった。
（イチ……イチ！　ヤダよっ、やだっ。絶対　ヤダ！！　）
「え……おいっ、二宮！」
びっくりした彼が駆け出したわたしの背中に向かって何か言った。けれど、わたしの意識はすでに雑踏に消えたイチにしかなく、泳ぐようにかき分けて二人を必死に追いかけた。

急いで二人を探したけれど、その姿はどこにも見当たらなかった。流れる人ごみの中でキョロキョロと辺りを見回し、絶望的な気分になる。そうして、そんな最悪な気分の時に限ってわたしは声をかけられるのだ。
もちろん、理由はハッキリしている。
「君、振られたの？　可愛いのに」
「さ、触らないでっ。振られてなんかないやい！」
そうだよ、まだ振られてもいない。告白さえしてないんだから……。
唇を噛む。
「強がってもダメだよ、泣いてるク・セ・に」
「……」
なんで、こう、わたしに寄ってくる男は　全然　空気を読まないの？

げんなりするんですけど。
絡んでくる男の腕に力の限り抵抗するけれど、相手は執拗だった。
わたしの肩を掴むと、顔を見ようと覗きこむ。そして、目を瞠る。
路上で泣いている女の子がいたからナンパしました、という軽いノリだったに違いない。
キッ、と睨み上げる。
「離して！」
「ニノ？」
ハッ、とする。

「イチ！」

振り返らなくても、声だけで誰かなんて愚問だった。
ナンパ男の腕を振り解いて、その声のする方へ走る。
涙でぼやけた視界でも迷うことなんて少しもなかった。だって、イチだもん。
「いちぃ……」
イチの匂いがする。鼻先をその首筋にくっつけてクンクンと犬のようにすり寄せる。
「なに？　どうしたの？」
いきなり抱きつかれた彼は驚いたように問いかけて、その優しい響きにわたしはまた涙が出た。
「会いたかったの……」
「……ニノ？」
大丈夫？　と彼はわたしの頭を撫でて、わたしの背中の方にいる気配に気付いたようだった。
「ああ。絡まれたの？」
「うん」
「僕の、彼女に何か用？」
これは、後ろにいる男へのイチの言葉……もっと、言ってやって！

全国ネットで宣言しちゃって！！
ぎゅうううう。
スッポンニノちゃんはもう絶対離さないよっ。そう、ゼッタイ！

「一之瀬君」

たとえ、彼女が呼んでもねっ！！

step. 9（後書き）

次、ニノ視点の本編最終話です。

ｓｔｅｐ．１０（本編最終話）（前書き）

この場面には、Ｒ１５程度の表現があります。ご注意ください！

step. 10（本編最終話）

「落ち着いた？」と覗きこまれて、「うん」と頷く。
ここは、駅近にあるシティホテルの一室。
スッポンニノちゃんは人間に戻って、ようやく会話らしい会話ができるようになりました。すでに終電はありません、ってことでホテルにお泊りすることになりました。
「ごめんね」
「いいよ、用事はほとんど終わってたし」
イチと会っていた女の人は、吉村さんと言って左手の薬指に結婚指輪がはまっていた。「一之瀬君」ってすっごく他人行儀に苗字で呼んでいたけれど、きっとホントはすっごく親しい間柄なんだと思う。
なんとなく。
コレは女の勘だけど！
ニノちゃんのイチに関する女関係の勘は、結構鋭いんだよ。特に、相手がイチに好意を持っているかどうかなんて目を見たらピンとくるんだからねっ。
あれは、雌豹の目だった。たぶん。
「用事って？」
訊いたらダメかな？　と思ったけど、気になったらトコトン気になるもんね。我慢はよくない。
「挨拶だよ、彼女、もうすぐ仕事辞めるから」
「結婚で？」
「続けるつもりだったみたいだけど、旦那さんが気にしてるらしくてね」
肩をすくめて、イチは息をついた。
なるほど、と思う。

不倫なんて、確かに面倒な相手だよね。イチっぽくないけど……
それくらい彼女を好きだったんなら頷けるよ。
『さようなら』
あの女〔ひと〕の最後の言葉は、イチへの別れの儀式だったのかな？
「じゃあ、寂しくなるね？」
わたしが気遣うように見上げると、イチはほんの少しビックリしたような表情になって、ふわりと笑う。
「そうだね、でも……僕にはニノがいるし」
「……え？」
それは、どういう？　まさか、まさか！
「慰めてくれる？」
ギュッ、と腰を引き寄せられ悪戯めいたイチの目がすぐそこにあった。
欲望にクラクラする。
「当たり前だよっ」
慰めるに決まってる！　わたし、超ガンバル！！
だから。
わたしのこと、もっと……見てよ。イチ。

「好きだよ……」
「……好き」
意を決して紡いだ告白が重なった。
え？　とお互いに顔を見合わせて同時に確かめる。
「「　本当に？　」」

可笑しなほど声が重なって、二人で笑ってしまった。
まあ、重なっているのは言葉や声ばかりじゃないけどね……それこそ、あそこや胸や唇まで全部を重ねてるもん。
深く浅く接しているトコロの、擦れあう情熱が気持ちいいよ、イチ。
「好きだよ」
キスする合間に離れた、彼の湿った唇がもう一度言った。
「……もっと、言って？」
すると、イチは不満そうに返した。わたしの裸の胸を掴んで、やわやわと揉む。
先端を摘みあげる。甘く上擦った声が出ちゃう。
果実みたいに食べないで。

「ニノも言わなきゃ言わないよ」

「好きぃ」
躊躇いなんか、ない。言っていいなら、ずっと、息をするたび唱えるもの。この気持ちが、あなたと重なりますように――。
覆いかぶさって上下に運動するイチの切ない表情にときめいて、もっと、もっとと揺さぶられながら手を伸ばす。

「イチが、いちばん、好き……」

ねえ、ちゃんと届いてる？
イジワル、しちゃヤダ。
って。
目で訴えて、わたしはイチから言葉と一緒に両想いの証をもらった。

ｓｔｅｐ．１０（本編最終話）（後書き）

「いち　にの　さん」本編、これにて完結です。
このあと、いくつかのその後・番外を掲載する予定です。よろしければ、そちらも覗いていただけると嬉しいです。

ここまで、お付き合いいただきましてありがとうございました！

jump. 0（前書き）

本編完結後、の一か月後くらいを想定しています。
場面の一部にR15程度の表現を含んでいます。ご注意ください！

jump. 0

イチがスキ。イチがスキ。イチがスキ！

心の中で唱えて、脱衣所の鏡に映る自分の姿に気合を入れる。

クルクルと巻いたような色素の薄い地毛に、卵型の輪郭、目は大きめで少し吊り目、ネコっぽいとよく言われるけど本当は嬉しくない。だって、気分屋だって言われているみたいなんだもん。

イチはわたしのこと、どんな風に思っているのかな？

好きだよ、とは言われたけど「どこ」が好きとは聞いてない。

高校の時のままだって思われていたら、悲しい。軽い女の子だって思われたまま付き合っているのだとしたら……体の関係もその延長だって思われてるかもしれないもの。

そうじゃない、ってちゃんと伝えなきゃいけない。

今夜のイベントが、そのチャンスだ。

イチの誕生日、用意にぬかりはない。イチのお姉さんのセンセにも助言してもらったし、ダイジョウブ。

ごくり。

わたしは、喉を鳴らして脱衣所を出る。少し、頬が熱かった。

扉を開けると、わたしの方を見たイチが驚いたみたいに目を見開いた。

え？　どこか、変かな。

まあ、お風呂から上がってこの服装もないか……と照れ隠しに笑ってみる。

「びっくりした？」
「びっくり、っていうか……どうしたの？　ニノ」
怪訝そうに訊ねるイチの座るソファに寄って、端に腰掛ける。
「どうもしない、けど……」
両手を前について、イチを上目遣いで見る。イチは怪訝な顔から戸惑った表情になった。
「ニノ？」
「あのね、今日、イチの誕生日でしょ？　だから」
弥生さんが貸してくれたＤＶＤでは女の子がこんなふうに男の人を誘ってた。胸の谷間を誇張するみたいに腕で胸を寄せて、もともと胸のラインを出すタイプのデザインなのにさらに目立つ。
たぶん、ブラジャーをしていないのもイチには気づかれていると思う。
そう考えるだけで、カァ！　と体が熱くなって胸が切ないほど張りつめた。
当惑していたイチの表情が気遣うようなふわりとした微笑みに変わる。
いいんだよ、というふうに。
わたしが無理をしているとバレたのかもしれない。
イチは優しいから、いつだって自分よりも相手の気持ちを優先してくれるのだ。
そういうトコロも大好き！　だけど。
首を振って、イチを見つめる。
頬が、熱い。彼の視線に焼けるみたいだ。
恥ずかしい。でも、本当の気持ちを伝えたい。
「ご主人様に、もっと、気持ちよくなって、欲しいの」
うわっ、と声を上げたかと思うとソファからイチが滑り落ちた。

「痛てえ……」
と、呻いて腰をさする。
「だ、大丈夫っ？」
わたしもソファから下りて跪く。
「大丈夫じゃ、ないよ。ばか」
責めるようなイチの視線にわたしは間違えたのかと思った。いきなり、触ったのはやはり性急すぎただろうか？
でも、見るからに……その、元気そうだったから確かめたくてサ。
と、恐る恐る彼の様子をうかがう。
イチは困ったように微笑んで、わたしの後頭部に手のひらを添えると引き寄せた。
唇と唇がそっと合わさって、重なる。
息が乱れるほどの情熱的なキスのあと、「責任とって、くれるんだろ？」なんて色っぽく誘って、彼はわたしの手をそこに優しく導いた。

うんっ、と頷いてわたしは一生懸命責任を果たした。
けど、ちょっと待って！
全然、気持ち伝わってないんじゃないの？　その時は嬉しくて、気持ちよくて、イチの甘い言葉にも感じちゃったけど……「それ」じゃ本末転倒なんだってば！

ｊｕｍｐ．１（前書き）

季節は春の手前くらいのエピソードです。
会話などにＲ１５程度の赤裸々な表現が含まれます。ご注意ください！

jump. 1

一日の仕事が終わって、わたしは　また　イチのマンションに戻ってきた。
「お邪魔しまーす！」
最近。
自分の借りている部屋に戻った記憶があんまりない。あー、そういえば一週間くらい前に一度？　衣替えで服を入れ替えるのに帰ったかな？
いい加減、存在意義が無いような気がしなくもないけど。と言うか！　ワタシ的には押しかけ女房計画進行中……なわけで、向こうのマンションはなければない方が都合がよかったり。
イチの反応が怖いから、口にはしないけどね……だって、ドン引きされたらどうすんの？
『なに、考えてんの？　ニノ、重いよ』
とか、優しい口調で言われてさ！　こんな時までイチってば優しいんだっ、えーん。
ありえない、って表情〔かお〕されたら……わたし、もう立ち直れないよっ！
家主の戻っていない真っ暗なリビングの電気をつけて、ハァと息を吐く。
口にはできないからイロイロ策を練ってはみたけれど……なかなかうまくいかないんだよねえ？
どうすればイチを懐柔できるのかな、と考える。
（センセ……に相談するのはイチから止められてるし。全然、わかんないや）

ソファにうずくまっていると、玄関の方でガチャリと扉の開く音。
イチが帰ってきたのかな？
でも、今週が締切だから校正があって大変だって言ってたのに……とリビングから玄関に顔を出すと、お姉さんだった。
「センセ、どうしたんですか？」
「ん？　今日は聖也の帰りが遅いと思って」
そう言うと、イチのお姉さん・弥生さんはニマニマ笑ってリビングに入ってきた。
イチがいないから？
イチがいないとお姉さんの望む夕食にはありつけないし、わたしと話すような話題なんてイチのことしかないのに？
「わかんないって顔ね？　どうせ、弟からわたしに相談するな、とか言われて悶々としてると思ったからよ。――ホラ。だと、思った」
わたしが、目を丸くしてるのを見てお姉さんは返事をしなくても納得したみたいだった。
勝ち誇ったみたいに、対面のソファに足を組んで座る。
すごい！　どうして、そんなに　見てた　みたいに分かるんですかっ！！
「聖也の行動パターンは大体わかるし、あとは　勘　よ」
勘？！　勘でわかっちゃうんですかっ。さすが、文壇の巨匠。恋愛マスター、橘真理子先生！
「センセぇ……」
「よしよし、情けない顔しないで。相談乗るわよ？　切羽詰まってるのね、ニノちゃん」
「わ、わかりますか？」
「ええ、わかるわよ。貴女が、聖也がどうしたら喜ぶか聞きにきた時の目を見れば……簡単だわ」
「イチ、すっごく喜んでくれたんです。でも……」
「でも？」
「わたし、口で言ったら引かれると思って……だから、イチが喜ん

でくれたら　しないで　してくれるんじゃないかって期待してたんです」
お姉さんは少し怪訝な顔になって、頷く。
「えっと、何を……かしら？」
「避妊です」
わたしは言って、俯いた。
「イチだったら、子どもが出来たら結婚してくれると思って……卑怯、ですよね？」
わかってます、自覚してます、確信犯です。でも、イチと別れずに済むんだったらその方がいいって思ったんだもの。
押しかけて、なし崩しに子どもつくって、結婚。なんて完璧すぎる計画なの、ふふふふふ。
ニノちゃん、怖い。
恐る恐るお姉さんの様子をうかがう。自分の可愛い弟が、こんな悪い女の毒牙にかかろうとしてるのだ……もしかしたら、追い出されるかもしれない。それだけはイヤです、許してください。
「ぷっ」
「ぷっ……？」
肩を震わせるお姉さんにわたしは首をかしげた。あれ、笑ってる？
「センセ？」
「あ、あなた……それ、本気？」
くすくすと笑って、弥生さんは目に涙までためていた。
「は、はい。本気、ですけど」
そんなに面白いことを言っただろうか？　いや、言ってないよ。断じて。
イチとの子どもだったら　絶対　可愛いもの。
欲しいって思うのが普通だよ？
「馬鹿ね、そんなの　口で　ハッキリ言ってやればいいわ。そうね、

準備してる時なんてどうかしら？」
名案、とばかりに目を輝かせる。
けれど。
わたしはお姉さんの提案に戸惑った。
「え？　でも……」
「大丈夫。子どもが欲しい、避妊しないでそのまま出してって言えば拒否なんてしないわよ。むしろ、すっごく喜ぶと思うわ」
自信満々にお姉さんは胸を張るけれど、わたしはまだ半信半疑だった。
そうかなあ？
イチが結婚したいって思ってくれてたら、そうかもしれないけど。あり得ないし。

「あら、信用しないの？　わたし、聖也が生まれた時から知ってるのよ……行動パターンはお見通しなの。ニノちゃん、貴女よりもずっと　ね？」

「はい」と頷いてしまったのは、迫る弥生さんの勢いに負けてしまったせいだった。
しかし、頷いてしまったのは紛れもない自分自身。
意を決して、準備をしているイチに声をかけた。いうことをきかない体を彼の背中にくっつけて、後ろから抱きつく。
「ニノ？」
「あの……お、願いがあるの。イチ、その……」
モゴモゴ。
やっぱり、怖いよ……お姉さぁん。
「？　どうしたの？」
後ろから巻きついたわたしの腕にイチの手が触れる。そっと撫で

て、わたしを振り返って首をかしげた。
「僕にお願いって、なに？」
「あ、あの……あの……わたしっ。イチの、子どもが欲しいの！」
瞬間、彼の体が固まったのがわかった。
でもっ、ここまできたら女は度胸だ！　目を瞑って、一気にまくしたててやるっ。
「だからっ、避妊しないで。そのままだして、ぁん！」
ドサッとわたしは仰向けに倒された。
ベッドの上で少しだけ体が跳ねて、押さえつけられる。イチの怖いほど真剣な顔が目の前にあった。
「い、イチ？」
「ニノ、本気？」
と、お姉さんと同じようなことを訊くからわたしは頬を膨らませた。
「本気だよ、どうしてみんな疑うの？」
「……不安だから」
「え？」
イチの答えにビックリして、でも、訊くことはできなかったの。
だって、入ってきたんだもん。深いキスと一緒に、下からも……
その、何もつけてないイチが、ね？

jump. 1（後書き）

「jump. 0」のエピソードから三か月後くらい、です。次の話はこの後日談となります。よろしければ、またお付き合いください。

jump. 2

四月。

その日はイチが外食に誘ってくれて、ウキウキと出掛けた。
イロイロ気になることはあるけれど……たとえば、一度避妊をせずにして以来体を重ねていないコトだとか……なんかイチが隠し事をわたしに対してしているみたいだとか……気にすれば、落ちこむこと請け合いなオンパレードなんですけど！
何はともあれ、外食。デートのお誘いだもん、楽しまなくちゃソンだよね？

「待った？」
「ううん、今来たトコだよ？」

なんて。
まだ日の高い時間にやってるんだよ？　まるで、学生みたいじゃない？
すごい、すごい。
手を叩いてはしゃぐわたしをイチは昔の見守るみたいに静かに笑って見ている。
「な、なに？」
ドキッとして、つい訊いてしまった。

「ん。いや、変わらないな、と思って」

なにそれ、成長してないってコト？　ムムッ……ハッ！
イカンイカン、なんか最近思考がネガティブだよ、わたしっ。

イチはきっと、悪い意味で言ってるんじゃないし！　うん、そうだよ。成長してなくてつまんないヤツってコトじゃ、ないよ、きっと！

「ニノ？」

わたしの顔を覗きこんで、イチは心配そうな表情をした。

ホラ、ちゃんと気にしてくれてる……大丈夫。

にこっ、と私が笑うと「どうかした？」とすんなり手を繋いで歩く。

うわっ！

わわっ、ど、どうしたの？！　いきなりっ。

「い、イチ……！」

初めてだ、手を繋いで歩いたの。本当に、普通のデートみたい。

振り返るイチに「どうして、手を繋ぐの？」なんて訊けない。訊いたら、魔法が解けるみたいに消えてなくなりそうだもん。怖い怖い。

不思議そうに首をかしげる彼に、「どこ、行くの？」ともう本当にどうでもいいコトを訊く。

イチと一緒だったらどこだっていいんだ……「まだ、ヒミツ」って言う彼にわたしは泣きたくなって俯いた。

「に、ニノ？！」

慌てたイチの声に、わたしはようやく気づく。

ああ、本当に泣いてる。イチ、ビックリしてるよ……ごめんね、驚かせて。

「な、なんでも……」

頭を振って、わたしは「なんでもないわけないじゃん」と心の中で思う。

もう、死んじゃう。いつまでイチと一緒にいられるのか、不安で、寂しくて、死にそうなの。

ウサギは寂しいと死んじゃうんだよ？
「イチ、わたしのこと、好きだよね？」
途切れ途切れのたどたどしい言葉で訊く。
「好きだよ」
「ホント？」
「うん、どうしたの？　何か不安？」
「だって、イチしなくなった。わたしが子ども欲しいって言ったから？　面倒になった？　隠し事もヤダよ」
なんか自分でも情けないくらい、子どもだ。子どもが子どもつくってどうする？　とか言われそう。
大丈夫、代わりにお父さんは落ち着いてるから。イチだから。
「あー。ごめん、不安にさせて。ニノに言うと姉さんに筒抜けっぽいからさあ」
「？　センセに？」
それに、なんの問題が？
という、わたしの声がイチには届いたのだろう。
「いや、だから、そういうトコが……口止めできないなと思ったんだよ」
「口止め？」
「うん、説明するより行こう。そしたら言うから」
イチの云わんとしていることがよく理解できなくて、わたしは彼に手を引かれショッピングモールのウェルカムアーチをボンヤリと見上げて涙を止める努力だけした。

わたしがイチと入ったのは、貴金属の結構有名なブランドショップだった。
目の前に広げられた煌びやかな装飾品……というか、コレ、指輪？だね。

しかも、左手の薬指に入れられてたり。
「えっ！　指輪！！」
ビックリして、横のイチに顔を上げ困ったように笑ってる彼と目が合う。ついでに、ガラスケースの向こうにいる店員の女の人も苦笑い。
周囲のお客さまにまで、注目されてたり！
声、大きかったですかっ、ごめんなさい！！
口元を押さえつつ、わたしはイチにもう一度目線を合わせ彼がなんて言うか待った。
「もちろん、婚約指輪。結婚指輪も決めれたらと思って嫌なら言って」
「……イヤ、」
イチの目に失望が浮かんだ気がした。
バカ、普通わかるでしょ？
――わたしが、あなたに　夢中　だってことくらい。
「じゃない！　するっ、絶対する！　今すぐ結婚して！！」
ガバッと彼に抱きついて、左手の薬指にはピタリとはまる銀色のリング。周囲の注目なんてもう気にしないの。むしろ、みんな見てよ！　わたし、結婚するよ、イチと！！
祝福の電報、大歓迎！！　ドンと来いっ。
「ちょ……ニノ、くるしいって！」
と、イチに諌められるまではしゃぐわたしは彼に抱きついてた。
スッポンニノちゃんを舐めんなっ。

ｏｔｈｅｒ．０（前書き）

他視点で「ｊｕｍｐ．２」を見てみれば……というお話。

other. 0

その男の人が店に来たのは、数週間前だった。

第一印象は、誠実そう。目立たないけれど、物静かで真面目そうでほわっとしてて顔も標準よりは上……旦那さんにしたら、すっごくいいかもと不埒にも思った。

彼は真剣に並べられた指輪を見比べ、シンプルなプラチナリングに決めた。でも、まだ決定ではないらしく彼女を連れてまた来ますと帰って行った。

きっと、彼女も可愛い感じなんだろうなと微笑ましくなった。

カランコロンと扉がなって、その地味な彼が入って来て、「あっ」と思う。

彼女、連れて来たのかしら？

と、あからさまにならない程度に出迎え、傍らを見る。

（ええっ！）

ちょ、ちょっと！　貢がされてるだけじゃないの？

かなり失礼なことを考えたけれど、それは仕方ないと思うの。

可愛い彼女にも限度があるでしょ？　桁違いよ、この子。

モデルみたいな小さな顔にスラリと伸びた四肢、女性らしい体のラインは美しい稜線で細いのに豊満だった。

目はくっきり二重で黒目がち、ちょっと気の強そうな吊り目も綺麗なパーツの中だと全然キツく感じない。ぽってりとした唇とふっくらとした頬、あどけないのに色っぽい大人の表情をして、少しアンニュイな雰囲気がドキリとする。

彼女は彼と手を繋いでいるのに、どこか心ココにあらずというふうにぼんやりとしている。

やっぱり、彼の片想いなんだわ……と隣を見遣れば案の定緊張し

た硬い表情をしている。
（そりゃあ、そうよねえ？　今からプロポーズですもの）
旦那にするにはかなりの優良物件だと思うけど、彼女なら引く手数多だろうし……どうかしらねえ？
「ニノ」
彼が準備した指輪を彼女の前に差し出した。
ぼんやりとした彼女はジッとその銀色のリングを見て、左手の薬指にスッと入ると「えっ！　指輪！！」とものすごく大きな声で叫んだ。
ビックリ。
（最初から目立ってはいたけれど）周囲も驚いたようで、かなりのギャラリーになってしまった。
彼女は彼を見上げ、こっちを見て、周りの様子にようやく気づいたらしい。しまった、と身を縮めて彼をもう一度仰ぐ。
ごくり、と喉が鳴ったら大変だわ。でも、なんだかドキドキするわね？
「もちろん、婚約指輪。結婚指輪も決めれたらと思って嫌なら言って」
真摯な彼の言葉に、彼女の答えは無情だったわ。
「……イヤ、」
なんて、言って。
断るのかと思いきや、彼女はガバッと彼に抱きついて店中の人間に聞こえるように宣言したわ。もしかして、わざと？
「じゃない！　するっ、絶対する！　今すぐ結婚して！！」
ギュウギュウに彼を締めつけて、ウサギみたいにピョンピョンと跳ねる。
キラキラとした笑顔が眩しいほど、輝いてた。あなた、ＣＭに使えそうよ？

彼女は、彼がもがいて止めるまで放さなかった。いや、彼が言っても離れはしなかったわね……渋々力はゆるめて抱きつくのも諦めたみたいだけど。

繋ぐ手は絶対離さなかったもの。

案外。

綺麗な彼女も、この物静かな彼にべた惚れ？　なのかもしれないわ。

other. 0（後書き）

ジュエリー店勤務のお姉さんから見た二人のお話（ジュエリー店のお姉さんは「天気予報士の恋」の彼女です）。
これにて、「いち　にの　さん」は完結とさせていただきます。本当はもう少し書きたい場面もあるのですが……というか、当初の目的だった場面はこの先にあるのですが、それはまた機会があったら書こうと思います。たぶん、結婚後のお話になるのでね（↑意味深）。

ここまで、読んでいただきありがとうございます。
他の作品でもお会いできるようにこれからも頑張ろうと思います。
少しでも皆様に楽しんでいただければ、それが私の糧となります。
ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0206o/

いち にの さん。

2011年4月21日22時25分発行